火星

平成二十二年八月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八四七号

平成二十二年八月号

七曜抄（七）

山尾玉藻

水音に巻きたしかなる落し文

でで虫の顔三角に仕舞ひけり

かまきりのながなが飛べり朝曇

杉の間を戻つてきたる夏花摘

PDF= 俳誌の salon

夜もすがら李の匂ふ安居かな

大仏の近くに寝ぬる旱星

空腹のしづかにありし花藻かな

堂守も鶏も出でをり夕立あと

苔の上を風ぬけてくる円座かな

草山の濡れてゐるなり盆の昼

PDF= 俳誌の salon

太白星

柳生千枝子

仔猫鳴くひよろりと歩みては転び
腕まくら汗の幼ナの深眠り
耽読の片頬緑射してをり
桐咲けり飛行機雲の未だ消えず
遠ざかる白帆の速さ夕茜
波音の夕べはげしく月見草
母の日の昏れてレモンの月が泛く

杉浦典子

帆柱の軋み八十八夜寒
息を吐ききつて海月の暗みたる

PDF= 俳誌の salon

祀るごと白繭ひとつづつに影

舫ひ綱解くに手順ある薄暑

じやがいもの花に正午の列車過ぐ

左利きの左が摑み青蛙

新仏に濡れゐるままのさくらんぼ

浜口高子

触れ合へるヨットの音の潮じめり

瀧風におでんの湯気のあふられし

山水の軸をもたげし青嵐

灯がひとつ入つてゆきし瓜畑

午下の海荒れてゐるなり心太

檻つかむ猿に見らるるソーダ水

蟬の殻昨夜のバケツの雨水に

PDF= 俳誌の salon

火星作品

山尾玉藻選

羽抜鶏いちべつの眼をつむりけり　宝塚蘭定かず子

失職の指へ渡らせ天道虫

観音に青梅は枝張りにけり

糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ

月下美人見にゆくシャワー使ひけり

水口の濁れる八十八夜かな　明石戸栗末廣

近景も遠景も山昼寝覚

下闇に入る水音のひびきけり

クレソンの花に終はりぬ野辺送り

田を植ゑて富士の裾野へ線路あり

釣り捨てし鯔にそよげる月見草　宝塚山田美恵子

広げある秣の上を夕立雲

牛乳の膜唇につく終戦日

PDF= 俳誌の salon

寝入る子に汗かく力ありにけり　神戸深澤　鱶

呼ぶ子の名間違へをるよ花ダリア

壬生狂言うしろ電車の過りけり

黄昏るる扇光れり壬生念仏

赤貝のひも噛み八十八夜かな

クレソンの花の馬穴の明易し

麦秋や余呉湖を出づる川ひとつ

夏鶯朝の湯浴みのやはらかし　宝塚山本耀子

薩摩隼人の家紋入りなる初幟

葭切や葦の根元の水溜り

夏草食む音の他なし岬馬

にはとりの樹にねまりたり麦の秋

夕さりの川は鏡に祭鉦　松井倫子

蟻蠓のなか自転車に浮き来たる

南吹く碑にびつしりと象形文字

妖精に注意と札や虹消えて

峡空に雲暮れ残る祭笛

PDF= 俳誌の salon

選のあとに

山尾　玉藻

糸伸ばしきし蜘蛛の子の草のいろ　　蘭定かず子

卵から孵った蜘蛛の子は伸ばした糸と風に乗って移動する。掲句の「蜘蛛の子」も何処からか風に乗ってきて、木の枝などから糸を伸ばしてきたのだろう。「草のいろ」という感受に、作者の新鮮な驚きと小さな命への慈しみが滲み出ている。この一語で「蜘蛛の子」を美しく荘厳させている。自然を見詰めること、それは愛。同時発表作〈月下美人見にゆくシャワー使ひけり〉には女性特有の心理が描写されている。

クレソンの花に終はりぬ野辺送り　　戸栗　末廣

亡骸を火葬に付した後、川沿いを戻る作者が見える。クレソンは清流に自生し白い花を咲かせる。作者はそのクレソンの花に亡き人の面影をふと重ねたのだろうか。それとも人を葬った虚しさを噛みしめているのだろうか。一見労を尽くさぬ表現のようながら、楚々とした「クレソンの花」に無量の思いを語らせる深い一句である。

寝入る子に汗かく力ありにけり　　山田美恵子

さっきまで飛び跳ねていた子が、今はぐっすりと昼寝をしているのだろうか。見れば全身から汗が噴き出ている。「汗かく力ありにけり」に、その旺盛な汗に心底驚嘆しつつ幼い寝顔に見入る作者が窺える。子供は眠ることにも無心で懸命なのだろう。同時発表作〈釣り捨てし鰯にそよげる月見草〉には作者の優しさが滲み出ており、これも愛ある一句。

黄昏るる扇光れり壬生念仏　　深澤　鱶

壬生寺の「壬生念仏」は、開け放ったお堂で執り行われる無言の仮面劇、謂わばオープンステージでのパントマイムである。掲句、黄昏せまる薄暗い堂内で、掲げられた扇だけが夕明かりをうけて浮かぶ、印象的な景である。野外の趣を取り込む無言劇らしく、夕明かりの「扇」に焦点を絞ったところに手練れの作者の手際を感じる。

にはとりの樹に寝まりたり麦の秋　　山本　耀子

放し飼いの鶏が樹に止まり眠っている。辺りの麦畑はすっかり熟れ切り、昼は森閑と深まるばかりである。物音ひとつ聞こえぬ静まり返った中、眠りこむ「にはとり」の薄い瞼が微かに動いたようだ。季語「麦の秋」によって、空間的、時間的な拡がりを感じさせる一句。（以下略）

PDF= 俳誌の salon

恒星圏

同人Ⅰ

高尾豊子

翡翠のその一瞬を眼裏に
翡翠に水の濁りの要ることも
浄土へと誘ふ蝶ゐて迷ひけり
風に乗り風起しゐる黒揚羽
老人ホームの窓開いてゐる新樹晴

白数康弘

夕焼の中なる五百羅漢かな
蚊の声のかすかを羅漢聴き給ふ
蜘蛛の囲のからまつてゐる羅漢かな
五百羅漢過りて蟻の列つづく
五百羅漢にいはれあれこれ萩の風

高松由利子

練供養菩薩伏眼に戻りくる
馬場口とある門前や余花の風
くわくこうや乳色なせる五線塀
昼膳に間のある筍提げて来し
湖の音聞きわけてゐる糸取女

大東由美子

翡翠を追ふやまなじり青くして
釣竿を置き去りにして源五郎
白き胸ぐつとせり出す燕の子
コンビニのオープンを待つ夜の新樹
羽抜鶏風に押されて囃されて

田中みのる

我が影の三倍五倍夏入日
若竹やスクール・ガイドの声さやか
ジーパンの神主が掃く松落葉
蚕豆や町筋かざる御神燈
扇港のクレーンに鳴り鯉のぼり

PDF= 俳誌の salon

獅子座

山尾玉藻推薦

見てゐたるたんぽぽの絮飛びにけり
猫の子を咥へゆく親緑雨中
遠雷のまま遠のきし鴉の子
夏落葉雨の匂ひの風がくる

笠置早苗

萍の花をのけくる亀の首
すすめられ妻より早き更衣
山城は慣はし多し瓜の花
郭公の声遠のきし畦の鍬

田中文治

航跡の渦のつぎつぎ梅雨兆す
きのふより雨のまつすぐ青葉肥
伊吹嶺の裾に刈藻のしづくせり
柿の花母となりたる牛の貌

奥田順子

更衣緑青いろの沼に出で
谷風の山風となる夏芝居
水無月や杉板のせ来ライトバン
霾やマストの上の風向計

松井倫子

金平糖の箱振つてみし柿の花
洋館の土足厳禁棕櫚の花
青年の背丈となりし更衣
奥の院へ坂がかりなる藤の花

岩井ひろこ

郵便夫出でくるモスク五月闇
中空に気球の浮かぶ入梅かな
畦に添ふ早苗のさ揺る月夜かな
銀紙の飴をまた剝く旱梅雨

藤原冬人

美術館出でし正面桐咲けり
馬あらふ父を見てゐる裸の子
病葉の張りついてゐる陶の椅子
居酒屋の笊に夏茱萸盛られあり

根本ひろ子

PDF= 俳誌の salon